

こども家庭庁・学校現場の動きを再検討する



開催日時：7月30日（日）9:00-10:30

話題提供者：両角達平さん（日本福祉大学）

参加人数：25名（運営含む）

話題提供

今回は、両角達平さんから話題提供をしていただきました。話題提供の最初は、ご自身の日頃のお仕事やこれまでの研究関心をご紹介いただきながら、両角さんの研究の全体像についてご説明いただきました。両角さんは、「若者の参画」を軸にしながら、教育、福祉、ユースワークを領域として研究しているそうです。

その研究の中でも、最も中心的に研究されてきたのがスウェーデンについてです。では、なぜスウェーデンの若者は社会参画できるのかということ、アソシエーション文化を育む社会的・文化的な土壌があるからだそうです。実際、スウェーデンの約7割の若者が何らかの若者団体に入っています。一方、日本では、若者が私的領域に対して関心が高い傾向があり、若者の社会参画施策についても、若者へのリソースの配分が十分に起きていない点が指摘されました。

次に、ユースワークの研究についてご紹介いただきました。ユースワークは、若者の余暇やユースセンターを基盤としつつ、若者団体が含まれ、学校も含まれることもあります。ユースワークの定義から入り、スウェーデンのユースワーク研究の事例を詳述してもらいました。その際、両角さんは、若者が余暇の時間で任意に選択するユースワークと、義務として行くことが前提とされている学校教育との違いを強調されていました。実際、家庭も学校も自分で選んだ場所ではないため、結果として、ユースワークと（学校における）シティズンシップ教育との違いがでてきます。それに関して、シティズンシップ教育(学校内)とユースワーク(学校外)を比較して示したのが【右図】です。学校では、学び・成長・社会化などの目的が強調されるのに対し、ユースワークでは、余暇の保障を重視しています。



この考え方にに基づき、両角さんからは、学校の生徒会や、探究的な学習などにも改善を促

す指摘があり、同時に座学的に民主主義を学ぶ学校教育の役割の重要性についてもご指摘がありました。

最後に、こども家庭庁の「こども・若者意見反映推進事業」について、両角さんのご意見を伺いました。この説明の前提として、両角さんから「インクルージョン」と「トランスクルージョン」の関係についての説明がありました。前者は外部の人を内部に入れていく発想。後者は、アウトサイダーとインサイダーの両者の関係や位置も変わり続ける発想です。その上で、これまでのこども・若者意見反映推進事業とりわけ、「子ども若者★いけんプラス」を見た際の両角さんの評価を説明していただきました。その際に、子どもがテーマの提案ができるようになったこと、多様な方法を引き出す方法論が用意されたこと、フィードバックの重視がなされるようになったことは良い点だと指摘されました。一方、意見を聞く大人・聞かれる子どもの関係性が固定化する懸念があるため、もっと大人から子どもへの権限移譲をしたり、若者団体への資源（決定権・助成金など）を支援すべきとのご指摘もありました。また、現状で重視されている若者の「政策形成への参画」だけでなく、若者団体や若者の地域の活動拠点への投資をもっと増やしていくべきとの指摘もありました。話題提供の最後には、「こどもの声」といった際に、子どもと若者の存在が混在して考えられている点や、大人の声も聞かれているのかという点などの問題点にも触れつつ、あらゆる人が参画し影響力を発揮できる社会が重要であると締めくくられました。

参加者との意見交換

話題提供の後、参加者と両角さんとで自由な意見交換を行い、話題提供にかかわる様々な論点がでました。

論点の一つとなったのは、学校教育と学校外（若者会議を含む外部）との役割分担についてです。例えば、両角さんからは、若者会議等の役割は重要でありつつも、政治的中立性を担保できる学校だからこそ、担える役割もあるとのご意見がありました。また、主体的でない学生も、政治を学ぶ景色を見ておいた方がよく、そういう意味でも学校教育は大切であるなどの意見もありました。一方で、ユースワークの本丸は目的性がない部分にあり、結果として市民性が育まれると捉えることが自然ではないか、という指摘も意見交換の中で生まれました。

論点のもう一つとなっていたのは、社会参画や民主主義を促す団体のあり方についてです。その際に、戦前戦後の日本で民主主義を目指した団体が本当に民主的であったのかという点も論点に挙がりました（例：参加者の主体性は高いが、非民主的な組織の存在など）。その上で、現代の日本の若者団体を育てるためには、若者団体を学校と切り離して義務的なものにせず、余暇的なものにする必要があること。そして、何らかの理由をつけて動員をしていくような団体にはいけない、という指摘も両角さんからありました。一方で、全く新しい考えや組織を作るというよりも、地域に既にある多様な社会教育施設や団体のリソースを活用していく発想を持つことも大切であるとも、両角さんから説明がありました。

最後に、両角さんから、「労働からの解放」の意義や、余暇、遊びの重要性。動員のない世界を作ることの重要性を再度指摘していただき、会を終えました。

(主な運営スタッフ：浜田、別木、古野、斉藤 報告書作成：斉藤)